

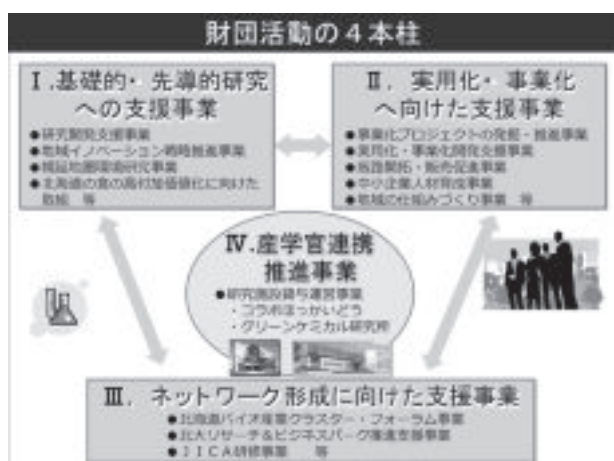
北大リサーチ&ビジネスパーク

伊藤 公裕

1. はじめに

ノーステック財団という団体をご存じでしょうか。毎年、公募によって新しい研究や産学官共同研究等への助成事業を実施しておりますので、研究開発に携わっている方は名前を聞いたことがあるかも知れません。

当財団は、「研究開発から事業化までの一貫した支援」を活動理念として、科学技術の振興と技術シーズの事業化支援を通じ、道内産業の振興や活力ある地域経済の実現を目指しております。正式名称を「公益財団法人北海道科学技術総合振興センター」といい、略称を「ノーステック財団」といいます。大学等における研究そのものの振興から、実用化・事業化を目指す研究開発、製品化や販路拡大支援までをカバーして様々な事業を進めております。



私は産学官連携を担当しており、産学官連携の“場”づくりを実施しています。その“場”づくりとして大きな取り組みとなっているが「北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会」で、当財団の中に事務局が設置されております。協議会は平成15年に設置され、現在では北海道大学、北海道、札幌市、

北海道経済連合会、北海道経済産業局、北海道開発局、公益財団法人北海道科学技術総合振興センター（ノーステック財団）、（地独）北海道立総合研究機構、（独）科学技術総合振興機構、（独）産業技術総合研究所北海道センター、（株）日本政策投資銀行北海道支店、（独）中小企業基盤整備機構北海道本部の12の機関が参加し、北大北キャンパスを中心に産学官連携に関わる機能集積を図って、研究環境、ビジネス環境の向上を目指そうとしています。

既存の建物を活用しながら協議会参加機関の機能を集めることによって「リサーチパーク」を作っているという考え方になっています。「北大」、「北キャンパス」とはいつでも、他の大学や他地域との連携も推進しております。

2. 産学官連携の“場”

「北大リサーチ&ビジネスパーク」

(1) 集積の進む北大北キャンパス

「北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会」では、当初、関係機関のネットワーク形成に取り組んだ後、良好な研究環境、ビジネス環境を築くための基盤整備に取り組み、15の試験研究施設などが集積してきました。

共同研究推進やベンチャー支援を想定して関係機関が協力してインキュベーション機能の充実に取り組み、オープンスペースラボの開設や中小企業基盤整備機構のインキュベーション施設の誘致、入居企業への賃料補助制度実施などに取り組んできました。生活面での基盤を改善するため、食堂の設置や銀行のATM設置など様々な働きかけを行い、正門から北キャンパスまで大学構内バスが運行されるようになり、利便性もかなり向上しました。

平成26年末には「フード&メディカルイノベーション国際拠点」という新しい産学官連携施設が建設される予定となっています。完成したあかつきにはひとつ屋根の下、大学と民間企業が連携しながら研究を推進していく予定となっています。

(2) 協議会による企業支援

関係機関の研究支援、企業支援に関する情報は、「北大リサーチ&ビジネスパーク」のホームページ(<http://www.hokudai-rbp.jp/>)に起業家の紹介や関係機関のセミナーおよび支援制度、インキュベーションルームの情報、若手の研究者紹介などを掲載しています。

また、ビジネス EXPO(主催：北海道技術・ビジネス交流会実行委員会)など、展示会等で関係機関に入居しているベンチャー企業などの展示をサポートしており、今年度は道外イベントにおいてもベンチャー企業等紹介の場を設ける予定です。最新の産業技術動向等に関わるセミナー、シンポジウムなども開催しています。

このほか、北大、道立総合研究機構、大手企業の開放特許を道内企業の新展開に活かしていくマッチングイベントや、全道の産学官連携関係機関のコーディネーター相互のネットワークづくりを支援するフォーラム開催などを関係機関と共催しております。

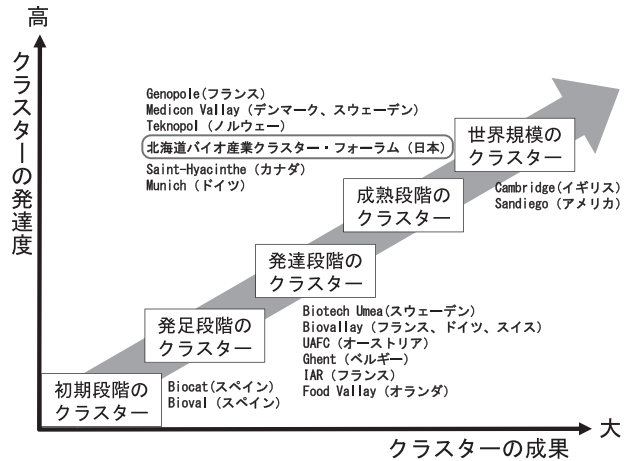
(3) 施設・設備

インキュベーション施設に関しては関係機関が集まって説明会を開催すべく企画中です。また、北大や道立総合研究機構のような保有設備を外部に開放している機関に関しては、説明会・見学会を予定しています。なお、北大の外部開放機器に関しては、どのような機器があるかを知らせていただく目的で、利用された企業には、協議会から補助をさせていただいております。

(4) 今後の展開

当財団では、120 を超えるバイオ関連企業のネットワーク化と事業支援を行う「北海道バイオ産業クラスター・フォーラム」事業を推進しております。

「北海道バイオ産業クラスター・フォーラム」は、平成23年に欧州委員会が発表した調査におきまし



※北海道経済産業局「欧州委員会調査報告書『Regional Biotechnology』について」より引用
欧州委員会によるバイオクラスターの格付け

て、世界16の主要バイオクラスターのうち、「成熟段階のクラスター」という格付けを得ました。

しかしながら、私共としてはまだまだ機能の充実を図っていかねばならないと考えています。世界レベルの研究開発力、産学官連携・融合・コーディネーション、ベンチャー企業の活力向上、国内外他地域との連携促進等々への取り組みを充実していきたいと考えています。

3. ヘルスイノベーションを展開する「北大リサーチ&ビジネスパーク」

(1) 健康科学・医療融合拠点

私達が世界レベルの研究開発の拠点として期待している分野に「食」、「環境」、「健康」、「医療」があります。「北大リサーチ&ビジネスパーク」には、もうひとつの側面として、いわゆる「国プロ」として推進しているプロジェクトがあり、「食」、「環境」、「健康」、「医療」の分野で集積促進を図っていくというものです。

「北大リサーチ&ビジネスパーク」は平成23年8月に文部科学省、経済産業省、農林水産省「地域イノベーション戦略推進地域」の「国際競争力強化地域」の指定を受け、これを基に「地域イノベーション戦略支援プログラム」に採択され、協議会が推進しています。平成24年度から地域イノベーション戦略推進事業「さっぽろヘルスイノベーション‘Smart-H’」プロジェクトとして、「健康科学・医療融合拠点」の形成に向けた取り組みを展開していま

す(<http://www.healthinnovation-hokkaido.jp/>)。

「さっぽろヘルスイノベーション ‘Smart-H’」では、「食」の機能性分析・評価拠点の機能強化、食素材の高付加価値化をはじめとした「食」・「健康」・「医療」領域の融合・発展的な研究を推進するとともに、人材育成、知のネットワーク構築、研究設備の共用化など、「ヘルスイノベーション」の実現に向けた高度・先端的な取り組みを産学官連携によって展開しています。

研究は国内外から優秀な研究者を招聘し、①食の機能性に関する評価系プロジェクト、②食の高付加価値化に関する素材系プロジェクト、③予防医学の発展に寄与する医療系プロジェクトの3つの分野を推進して健康科学・医療融合拠点の形成を目指すこととしています。

「食」の機能性評価・分析に関しては、道内5カ所にフードイノベーション拠点として評価拠点を構築してきており、とりわけ江別モデルと称している人による食品機能性の評価試験を行うヒト介入試験システムに関しては、評価分析の実績は恐らく全国ナンバーワンであると思います。



フードイノベーション拠点

食品の抗酸化能を分析する「抗酸化機能分析研究センター」、長期にわたる追跡調査研究を行う「るもいコホートピア」、生活習慣と脂肪関連疾患の分析を行う「高度脂質分析ラボ」、腸内環境の評価系を開発する「腸内環境改善研究センター」を含めこれら拠点の機能強化を進めています。

(2) 事業推進体制

このプロジェクトの推進組織は「北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会」となっています。実際

の事業推進に関しては、プロジェクトディレクターを中心に関係機関による会議体、外部のアドバイザーリーボードを配置し、大学・公設試等の研究機関が集まって企業と密接に連携しながら、産学官で実施する体制となっており、ノーステック財団が総合調整機関となっています。財団内に「地域イノベーション戦略推進室」という事業専門の部署を設置し、プロジェクトディレクターはノーステック財団の常務理事が兼務しております。



事業推進体制

(3) 人材育成

次に人材育成に関しては、「食」・「健康」・「医療」領域の知見を有する健康食品開発やヒト介入試験のコーディネーターのような研究人材や医療現場の実践者の育成を行う「ヘルスイノベーションカレッジ」、事業化・知的財産、国際連携などの専門性を有しイノベーションの創出に必要なマネジメント能力を育成する「プロジェクトマネージャー育成プログラム」を実施しています。

(4) 知のネットワーク構築

ノーステック財団に5人のコーディネーターを配置し、プロジェクト立ち上げや事業化の支援を推進しています。新しいシーズ・ニーズに関する情報収集、整理や地域の大学との連携など、知のネットワーク構築を目指した取り組みも展開しています。

(5) 研究設備・機器等の共用化

前述のフードイノベーション拠点「高度脂質分析ラボ」では、生活習慣病やアルツハイマー病に脂質代謝異常や過酸化脂質などの脂質分析を最先端の技

術で分析できる機器を導入しており、その先端設備機器の共用化を推進しています。

4. 産学官連携は変わっていく？

(1) オープンイノベーションの場

「オープンイノベーション」という言葉はかなり以前から使われるようになって、産学官連携の世界でも浸透していると思います。研究の着手から事業化までのスピードアップや新規分野開拓などを目的に外部の資源、知恵を活用しようとする考え方といえます。

当初はもっぱら事業化段階において外部のネットワークを活用するという考え方が主流であったかと思いますが、どうも最近は世の中が複雑になっていることもあり、研究を企画する段階から様々な人達と一緒に作っていく方が本来のオープンイノベーションの意味があるように思います。

産学官連携に関係する機関でも、コーディネーター、マネージャー、リサーチ・アドミニストレーター、ライセンス・アソシエイト等々、研究支援や企業経営相談、技術移転、事業化支援などに取り組む専門人材が増えてきました。昨年度は一度コーディネーターなどの人材達が相互にネットワークを築いていただく交流会を開催しました。

ともすると、バイオ、電子デバイス、機械など専門とする分野別にコーディネート活動を見てしまう傾向がありましたが、大学等研究機関に所属し、研究者・シーズに明るいコーディネーター、加工や部品など周辺技術に詳しく開発を得意とするコーディネーター、知財に詳しく技術移転を担っていけるコーディネーター、たくさんの企業を知っていて販路開拓など出口側を得意とするコーディネーター等々、非常に幅広い人材が活動しております。このような専門人材のタテヨコのネットワークを構築していくことが、オープンイノベーションの場として重要ではないでしょうか。

(2) 「引き出し」を増やす

日本では産学官連携は、「あまりうまくいかなかった」という意見があります。「人材や資金が投入されてきた割には成果が見えていない」という趣旨の意

見かと思いますが、これまではあまり前例のないことを手がけてきた点や、体制づくりに重点が置かれてきたというのも、そのような評価になった原因として大きいと思います。

ここにきて、本来の「コーディネート活動」、「産学官連携」に立ち返って本質的に活動を考える必要性が高まってきていると思います。コーディネート活動に携わる人材は、知恵や技術、ネットワークなど元々たくさん「引き出し」を持っています。コーディネーター同士が得意とする「引き出し」を融通し合うことでコーディネートの幅はぐんと広がるのではないのでしょうか。

集団でアイデアを出し合って、問題解決に結びつけていく方法に「ブレインストーミング」があります。ブレインストーミングの“作法”は、

- ① どんな変わった意見があってもけちを付けない
- ② 質よりも量を求めどんどんアイデアを出す
- ③ 奇抜なアイデアを歓迎する
- ④ 他人の発言に枝葉を付けてアイデアを増やす
(便乗歓迎)

だそうです。

コーディネーター交流会のような“場”は、色々な技術分野の人達、色々な得意領域の人達が集まっている意義が出てきそうです。「相乗効果」や「共鳴」といった「1 + 1」が2以上になるような効果が期待できるのではないのでしょうか。

このような“実態としての連携”を生み出していくことが産学官連携の今後を変えていくように思います。

伊藤 公裕 (いとう きみひろ)

公益財団法人
北海道科学技術総合振興センター
(ノーステック財団)産学官連携推進部長

